〔B 年〕復活日(2023 年 4 月 9 日)

【旧約聖書日課】創世記　9章8～13節

8神はノアと彼の息子たちに言われた。9「わたし
しは、あなたたちと、そして後に続く子孫と、
契約を立てる。10あなたたちと共にいるすべて
の生き物、またあなたたちと共にいる鳥や家畜
や地のすべての獣など、箱舟から出たすべての
もののみならず、地のすべての獣と契約を立て
る。11わたしがあなたたちと契約を立てたなら
ば、二度と洪水によって肉なるものがことごと
く滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を
滅ぼすことも決してない。」
12更に神は言われた。「あなたたちならびにあ
なたたちと共にいるすべての生き物と、代々と
こしえにわたしが立てる契約のしるしはこれで
ある。13すなわち、わたしは雲の中にわたしの虹
を置く。これはわたしと大地の間に立てた契約
のしるしとなる。

【使徒書日課】

ローマの信徒への手紙　6章3～11節

3それともあなたがたは知らないのですか。キ
リスト・イエスに結ばれるために洗礼を受けた
わたしたちが皆、またその死にあずかるために
洗礼を受けたことを。4わたしたちは洗礼によっ
てキリストと共に葬られ、その死にあずかるも
のとなりました。それは、キリストが御父の栄
光によって死者の中から復活させられたように、
わたしたちも新しい命に生きるためなのです。
5もし、わたしたちがキリストと一体になってそ
の死の姿にあやかるならば、その復活の姿にも
あやかれるでしょう。6わたしたちの古い自分が
キリストと共に十字架につけられたのは、罪に
支配された体が滅ぼされ、もはや罪の奴隷にな
らないためであると知っています。7死んだ者は、
罪から解放されています。8わたしたちは、キリ
ストと共に死んだのなら、キリストと共に生き
ることにもなると信じます。9そして、死者の中
から復活させられたキリストはもはや死ぬこと
がない、と知っています。死は、もはやキリス
トを支配しません。10キリストが死なれたのは、
ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きて
おられるのは、神に対して生きておられるので
す。11このように、あなたがたも自分は罪に対し
て死んでいるが、キリスト・イエスに結ばれて、
神に対して生きているのだと考えなさい。

【福音書日課】ルカによる福音書　24章1～12節

1そして、週の初めの日の明け方早く、準備し
ておいた香料を持って墓に行った。2見ると、石
が墓のわきに転がしてあり、3中に入っても、主
イエスの遺体が見当たらなかった。4そのため途
方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人がそ
ばに現れた。5婦人たちが恐れて地に顔を伏せる
と、二人は言った。「なぜ、生きておられる方
を死者の中に捜すのか。6あの方は、ここにはお
られない。復活なさったのだ。まだガリラヤに
おられたころ、お話しになったことを思い出し
なさい。7人の子は必ず、罪人の手に渡され、十
字架につけられ、三日目に復活することになっ
ている、と言われたではないか。」8そこで、婦
人たちはイエスの言葉を思い出した。9そして、
墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終
を知らせた。10それは、マグダラのマリア、ヨハ
ナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の
婦人たちであった。婦人たちはこれらのことを
使徒たちに話したが、11使徒たちは、この話がた
わ言のように思われたので、婦人たちを信じな
かった。12しかし、ペトロは立ち上がって墓へ走
り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかな
かったので、この出来事に驚きながら家に帰っ
た。

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

創世記　9章8～13節

8神はノアと彼と共にいる息子たちに言われた。9「私は今、あなたがたと、その後に続く子孫と契約を立てる。10また、あなたがたと共にいるすべての生き物、すなわち、あなたがたと共にいる鳥、家畜、地のすべての獣と契約を立てる。箱舟を出たすべての*もの*、*地のすべての獣と〔別訳→ものから、地のすべての獣まで〕*である。11私はあなたがたと契約を立てる。すべての肉なるものが大洪水によって滅ぼされることはもはやない。洪水が地を滅ぼすことはもはやない。」12さらに神は言われた。「あなたがた、および、あなたがたと共にいるすべての生き物と、代々とこしえに私が立てる契約のしるしはこれである。13私は雲の中に私の*虹〔直訳→弓〕*を置いた。これが私と地との契約のしるしとなる。

ローマの信徒への手紙　6章3～11節

3それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにあずかる洗礼を受けた私たちは皆、キリストの死にあずかる洗礼を受けたのです。4私たちは、洗礼によってキリストと共に葬られ、その死にあずかる者となりました。それは、キリストが父の栄光によって死者の中から復活させられたように、私たちも新しい命に*生きるためです〔直訳→歩むためです〕*。5私たちがキリストの死と同じ状態になったとすれば、復活についても同じ状態になるでしょう。6私たちの内の古い人がキリストと共に十字架につけられたのは、罪の体が無力にされて、私たちがもはや罪の奴隷にならないためであるということを、私たちは知っています。7死んだ者は罪から解放されているからです。8私たちは、キリストと共に死んだのなら、キリストと共に生きることにもなると信じます。9そして、死者の中から復活させられたキリストはもはや死ぬことがない、と知っています。死は、もはやキリストを支配しません。10キリストが死なれたのは、ただ一度罪に対して死なれたのであり、生きておられるのは、神に対して生きておられるのです。11このように、あなたがたも、自分は罪に対して死んだ者であり、神に対してはキリスト・イエスにあって生きている者だと考えなさい。

ルカによる福音書　24章1～12節

1そして、週の初めの日、明け方早く、準備をしておいた香料を携えて墓に行った。2すると、石が墓から転がしてあり、3中に入っても、主イエスの遺体が見当たらなかった。4そのため途方に暮れていると、輝く衣を着た二人の人がそばに立った。5女たちが恐れて地に顔を伏せると、二人は言った。「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。6あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。まだガリラヤにおられた頃、お話しになったことを思い出しなさい。7人の子は、必ず罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか。」8そこで、女たちはイエスの言葉を思い出した。9そして、墓から帰って、十一人とほかの人皆に一部始終を知らせた。10それは、マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコブの母マリア、そして一緒にいた他の女たちであった。女たちはこれらのことを使徒たちに話した。11しかし、使徒たちは、この話がまるで馬鹿げたことに思われて、女たちの言うことを信じなかった。12しかし、ペトロは立ち上がって墓へ走り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きながら家に帰った。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・4 月 9 日「復活日」の日課主題は「キリストの復活」。「復活日（イースター）」の祝いは、伝統的に前夜の「徹夜祭」から始まり、日中にまで設定されてきた。この習慣を、現代でも多くの教会が、形を変えながら踏襲している。これを踏まえて、教団の主日聖書日課表では、「復活日」の主日聖書日課として、「前夜または早朝」と「日中」にそれぞれ用いるための日課セットを設定している。今回は、「前夜または早朝」の復活日主日聖書日課を用いる。

・旧約聖書日課は、「創世記」から、ノアの洪水物語の結末に置かれた神の祝福の契約の箇所の一部。使徒書日課は、「ローマの信徒への手紙」から、パウロの「洗礼」についてのキリスト論的理解が確認される箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、「週の最初の日」の「空の墓の報告」の逸話箇所。

旧約日課（創世記 9 章より）

・「創世記」および「洪水物語伝承」については、資料「聖書と祈りの会230301」を参照。

・日課箇所は、「創世記」6~9 章の「ノアの洪水物語」の結末として描かれる、神の祝福の約束の言葉の一部。ここで神の言葉は「子孫保全の契約」として語られ、9~17 節が相当。古代オリエントで広くみられる「洪水伝承」では、シュメール神話を起源としていると考えられるが、その基本構図は、神々が、自分たちのために労働する者として創造した人間が増えすぎ、手に負えなくなったために抹殺しようとしたが、一部の神に信頼されていた人間だけがあらかじめ洪水を告げられていて助かった、というもので、人間は神々の都合に振り回された存在として描かれているという。これに対して、「ノアの洪水物語」では、人間の「悪」に焦点が置かれ、その「悪」のゆえに滅ぼされなければならない人間が、なお後の時代に生かされ続けていることの理由として、神の「人間および被造物を永遠に保全する約束」が提示されている。つまり、人間の「悪」に焦点が置かれることによって、逆に、神の力（＝「被造物絶滅計画遂行能力」）と意志（＝「被造物保全」）に関する基本的な神学（神論）が提示されている。

・ユダヤ・キリスト教の主流神学では、人とその他の被造物を区別し、人だけが神から特別な計らいを受けているものとして扱われていることを前提にした議論がなされる傾向にあるが、「旧約」にはしばしば、人をその他の被造物と同列に扱う言説が見られる。日課箇所の他、詩編などにも見られる。

・「雲」は、神の臨在を示す現象として、しばしば用いられる（出エジプト記 14 章等の「雲の柱」、同 19 章のシナイ契約の場面など参照）。

・「虹（ケシェト）」は「弓」を意味する語。英語でも「虹（レインボゥ）」は「弓（ボゥ）」で表される。

使徒書日課（ローマ 6 章より）

・「ローマの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の第一に置かれた書簡文書。パウロが未訪のローマ教会共同体に宛てて、自分の訪問計画を伝え、その後のエスパニア伝道計画への協力を呼びかけるために記した。パウロは、コリント伝道などを通して、ローマ教会共同体のメンバーの一部とすでに交流を持っていたと考えられるが、それゆえにローマ教会共同体内でパウロに対する誤解なども広まっている恐れを認識していた。そこで、彼らに対して自分の福音理解を説明し、誤解を解いておくことを意図して論を展開していると考えられる。紀元 1 世紀のローマ市は、ユダヤ人の一大居住地で、一説によると市域住民の 1 割をユダヤ人が占めていたとされる。このローマのユダヤ人社会の中で広がっていた教会共同体運動には、アンティオキアの場合と同様、早くから異邦人が加わっていたと考えられる。当時のユダヤ教では、すでに、異邦人がユダヤ教を受け入れ、割礼授与と律法遵守によって改宗者ユダヤ人となる道が開かれており、多くの改宗ユダヤ人が存在したが、同時にユダヤ教に共感しながら未改宗の異邦人も相当数、ユダヤ会堂に出入りしていた。彼らは、「神を畏れる人」と呼ばれている。使徒らの教会共同体は、彼らをどのような状態で自分たちの共同体に受け入れるべきか、葛藤を続けていたが、パウロは早くから、ラディカルに「割礼授与と律法遵守は不要」と主張し、ユダヤ伝統主義に立つグループと対立していた（ガラテヤ書など参照）。ローマやアンティオキアの教会共同体を指導していた使徒ペトロは、この問題に対してより穏健に対処し、当面はユダヤ人と異邦人にそれぞれの異なる基準を適用する方策を取っていたと考えられる。これによって、一時、パウロはペトロらの指導下から離れることを試みたと推認されるが（使徒 15~16 章など参照）、後には調停的な立場を取るようになった（コリント書など参照）。本書簡は、調停的な立場を取るようになったパウロの福音理解の試みとして位置づけられる。

・日課箇所で、パウロは、おそらく教会共同体で最初から入会儀礼として実施されていた「洗礼」について、どのように理解されるものなのかを確認し、それによってもたらされる信仰者の自己理解を明示しようと試みている。5 章までで、パウロは、ユダヤ人の歴史的意義を認めつつ、ユダヤ人と異邦人の双方が拠って立つ共通の土台として、「旧約」から、アブラハムの故事（4 章）やアダム論（5 章）を展開していた。それを踏まえて、現に教会共同体の共通財となっていた「洗礼」を全共同体を基礎づけようとしている。パウロの「洗礼」論の出発点は、常に、「洗礼によってキリストに結ばれた」（3 節、ガラテヤ 3:27）ということにあるが、これはおそらく、主イエスへの信従を基礎とする使徒たちの言説に基づく。これをパウロはさらに展開して、「キリストの死と復活にあずかること」とし、人としての根源的変革が生ずる出発点に位置づけようとするのである。

福音書日課（ルカ 24 章より）

・日課箇所は、主イエスの復活顕現伝承の第一の場面で、「空の墓の発見」の逸話を伝えている。この逸話伝承は、四福音書で共通しており、その第一発見者は、週の初めの日の朝早くに香料や香油を携えて墓を訪れた女性たちである。彼女たちの報告を聞いた使徒たちの多くは、その証言を真に受けないが、ペトロがその証言を確かめようと墓に向かったという逸話は、「ルカ」と「ヨハネ」だけが伝えている。また、女性たちに墓所で告げた天使と思われる者を「二人」として描くのも、「ルカ」と「ヨハネ」だけである。なお、女性たちの顔ぶれについて、「マタイ」「マルコ」「ルカ」は複数の者の名を挙げているが、「ヨハネ」は一人「マグダラのマリア」だけを挙げている。「マグダラのマリア」は四福音書が共通して挙げる名であり、「空の墓の発見」伝承がこのマリアを中心に証言されたことに基づくものであることを示唆している。

・「ルカ」の描写する「空の墓の発見」の逸話は、「マルコ」や「ヨハネ」と同様、ほとんど超自然的な描写を含まない。これを超自然的な描写で描くのは「マタイ」だけであり、「マタイ」は加えて、ユダヤ人の間に「イエスの遺体は盗まれた」という噂が広まっていたという挿話を伝えている。

・「ルカ」は、「マタイ」や「マルコ」と同様に、天使が告げる「復活なさった（エゲイロ）のだ」という言説を伝えている。この語（エゲイロ）は、「起き上がる」ことを意味する一般的な語で、各福音書で広く用いられている。一方、「ルカ」は、この「復活なさった」方のことを「生きておられる方（＜ザオー）」と表現している（6節、23節）が、これは「ルカ」のみに見られる特徴である。この語は、「ルカ」が「放蕩息子のたとえ」で二度用いている（15:13、15:31）。また、「ルカ」の続編である「使徒言行録」冒頭では、復活されたイエスのことが「御自分が生きていること（＜ザオー）を」と表現されている。このような一連の用法から、「ルカ」の考えている「復活」が、死体の蘇生とは異なる次元で捉えられていることが分かる。

・「ルカ」の描くこの逸話伝承の特徴に、「思い出す（ミムネースコマイ）」という表現が繰り返される（6 節、8 節）。このような描写は、他の福音書の並行箇所には見られない一方、「ルカ」が続いて描く復活顕現伝承の「エマオへの途上」の逸話や「弟子たちへの顕現」の逸話でも、彼らの様子を描く上での基本概念となっている。すなわち、一連の復活顕現伝承は、弟子たちが、かつてガリラヤの地で主イエスによって示されたことを「思い出す」ことと深く結びついて解釈されている。また、この語を「ルカ」は、十字架の上で主イエスに願いを語った犯罪人の発言の中でも用いている（23:42）。この語と語根を同じくする「記念（アナムネシス）」は、「ルカ」とパウロが「主の晩餐」における主イエスの言葉として伝えている（ルカ 22:19、Ⅰコリ 11:24,25）。

来週の誕生日（4 月 9 日～15 日）

。

主日礼拝の讃美歌から

・21-331 番「主はよみがえられた」は、テゼ共同体の讃美で、フランスの作曲家ベルティエが作曲。テゼ共同体は、改革派牧師の子としてスイスに生まれ自ら牧師となったロジェ・シュッツ（ブラザー・ロジェ）が、1940 年にフランス・テゼで超教派の「和解の共同体」を始め、ユダヤ人難民や孤児を匿ったことから始まった祈りの共同体（観想修道会に近い）。ベルティエは、パリ・聖イグナチオ教会オルガニストとしても活動する傍ら、1975 年以降、テゼ共同体のために多くの讃美を作曲した。

・21-325 番「「キリスト・イエスは」（＝Ⅰ148「すくいのぬしは」）は、原詞が 14 世紀のラテン語聖歌で、1708 年発行英語讃美歌集『ダビデの竪琴』で英訳詞がこの曲と組み合わせられてから、代表的な英語イースター讃美歌として歌われてきた。

・21-79 番「みまえにわれらつどい」（＝Ⅱ179）は、アフリカ系米国人の霊歌の伝統の中から生まれた讃美讃美で、19 世紀前半の米国聖公会で作られたと考えられているが、詳細は不明。

・21-81 番「主の食卓を囲み（マラナ・タ）」は、カトリック信徒の作曲家・新垣壬敏（ツグトシ）が、Ⅰコリ 16:22 の「マラナ・タ（主よ、来てください）」等に基づき、主の祈りの中心主題を黙想する中で 10 年かけて作詞作曲。新垣は第二ヴァチカン公会議後の典礼改革の中で進められた母国語聖歌創作をリードしてきた一人で、多くの聖歌・讃美歌が教派を越えて歌われている。

21-331「主はよみがえられた」

Surrexit Dominus vere

Surrexit Dominus vere. / Alleluia, Alleluia, / Surrexit / Christus hodie. / Alleluia, Alleluia.

21-325「キリスト・イエスは」

Surrexit Christus hodie

(English Translation)

1. Christ the Lord is ris'n today, Alleluia! / Sons of men and angels say, Alleluia! / Raise your joys and triumphs high, Alleluia! / Sing, ye heav'ns, and earth reply, Alleluia!
2. Love's redeeming work is done, Alleluia! / Fought the fight, the vict'ry won, Alleluia! / Jesus' agony is o'er, Alleluia! / Darkness veils the earth no more, Alleluia!
3. Lives again our glorious King, Alleluia! / Where, O death, is now thy sting? Alleluia! / Once he died our souls to save, Alleluia! / Where thy victory, O grave? Alleluia!

21-79「みまえにわれらつどい」

Let us break bread together

1. Let us break bread together on our knees;
   Let us break bread together on our knees.

Refrain: When I fall on my knees, / With my face to the rising sun, / O Lord, have mercy on me.

2. Let us drink wine together on our knees;
   Let us drink wine together on our knees. [Refrain]
3. Let us praise God together on our knees;
   Let us praise God together on our knees. [Refrain]